

Date 2014. 8. 10

No /

"Le Nozze di Figaro, K.492" and "Vocal intonation"

< 学習を終えたその後 >

2ヶ月半に亘る本学習から3週間が経ち、本学習のその後を
系塵める。

徐々に何れ柄でも本学習における理想像の阴かりに
差し掛かる様、日々実践する毎日である。

本学習の最後には系塵めた"感じとめること"の実践として、
本日、上野にある国立西洋美術館の常設展を訪ねた。
そこで、個々の美術品から以外に、"自身の生仕方"
"コミュニケーション"に702、10に触れるものがあつた。

— 自身の生仕方 —

美術館冒頭で、本美術館の創設の基にたつた
松方幸次郎の人物学んだ。美術館内の作品は、
一部を除き、松方幸次郎が集めたものからなること。
松方幸次郎の美術品収集の目的は、冒頭の解説

によると、日本の美術家達に芸術を鑑賞出来る機会を提供したいとの思いからである。より良く生きるとは、自分以外の人のために何かだけ尽くせよということ。松方幸次郎の発想は自身の生誕の指針にもなった。

—コミュニケーション—

美術鑑賞後、併設のレストランでゆっくり時間を取り、食事を楽しんだ。レストランから見える美術館の中庭の景色は、青く生った若き樹木に程よい安らぎを与える雨が印象的であった。レストランの方から、一品一品のご提供の料理に味方の助けになる一言ももらう。一人や二人で考えている相手(私)に、コミュニケーションにおいて声をかける際には、この関合は重要である。

理性的なアクションへの道への際に、今も続けているおぼろげな鑑賞、聴くことの大切さ、これは糧になるというもの、感じること磨けるものは、自ら進んで行動し、挑戦する次第である。